

志賀直哉を読む

首藤 静夫

当会の読書会で志賀直哉の短編を読んだ。先ず『網走まで』を、次いで『灰色の月』を鑑賞した。

志賀直哉は小説の神様と言われるが、大きくは私小説に分類されるらしい。私小説とは日本文学独特の用語で、自分の実体験を赤裸々に描写することに重きを置いた。代表が田山花袋の『蒲団』である。自分と女弟子との恋愛感情をリアルに描いたとされる。

志賀の作品は『暗夜行路』『和解』『城の崎にて』など、長編・短編を問わず実体験に基づくものが多い。しかし露骨な描写ではない。自分の内面を見つめた気品ある作品に仕上がっている。

『網走まで』では作者が汽車で上野から宇都宮に向かう。偶々乗り合わせた母子に、他生の縁で絡む話である。乳飲み子と気むずかしい男児を抱え、疲れた様子の母親が子供たちに翻弄される。聞けば網走まで行くという。周囲に気づかいつつ、この調子で網走までか——車中の母子の様子と作者の心配が丁寧に描かれている。

読書会では、網走に行く目的、本当に網走か、無理心中では、家出したのでは、夫はどこになど、思い思いに述べられた。短編ゆえに省略が効いている。読者の想像がふくらむ。

『灰色の月』では終戦二ヶ月後の山手線内の様子が描かれている。空襲や応召から命長らえた安堵感のなか、乗り合わせた一少年工の存在でその場の雰囲気が変わる。少年工と自分や周囲の乗客との微妙な間合い。少年工は食べていないらしい、しかし誰もどうしてやることもできない。作者のとつさの動作と悔悟、少年工の発した投げやりな一言。これだけを材料に作品を高みに上げている。私小説もさまざまだ。

志賀直哉の作品はやさしい言葉で書かれている。読者に分かり易いように気を配っている。加えて文脈にメリハリが効いて読後の印象が深い。谷崎潤一郎が彼の文章を評して、「複数作家の作品を集めた選集で彼の作品だけは紙質が違うのではと思えるほど紙面が清潔である」旨を述べている。

学ぶべきことが多い。